

## イスラエルの大学で原爆と憲法9条を講義する

丸山直起  
(PRIME 客員所員)

### 1 はじめに

私は2009年3月から6月末までの春学期の間、イスラエルのエルサレムにあるヘブライ大学で講義とセミナーをおこなった。これは同大学人文学部東アジア学科と国際交流基金の依頼で実現したもので、日本に関する講座を担当してほしいと要請があったとき、私はヒロシマ・ナガサキの原爆被害と、日本が世界に誇る憲法9条を講義のなかで取り上げ、学生たちと意見交換し、いくたびも戦乱に見舞われ、いまなお紛争が絶えないこの地の若者がどういう反応を示すだろうか、実際に自分で確かめたいとの思いがあったので、喜んで引き受けることにした。以下にイスラエルの学生と交流した4カ月の体験について述べる。

### 2 ヘブライ大学

イスラエルには主要な大学が6校あり、いずれも公立校である。名門のヘブライ大学の開校は1925年で、これに先立つ1923年にはノーベル賞を受賞したばかりのアルバート・アインシュタインが記念の初講義をおこなっている。国の独立が1948年だから、国家よりもはるか以前に大学を建設したところに、ユダヤ民族の教育・学問にかけた決意を知ることができる。ちなみに、アイン

シュタインは自分の原稿などすべての資料をヘブライ大学に寄贈するよう遺言を残している。ヘブライ大学は世界の大学ランキングの100位内に入っており、ノーベル賞の受賞者も輩出している。学生数は2万4000人で、ファカルティは2000人以上。

キャンパスは、かつてメインであったエルサレムのマウントスコープスに人文・社会科学系学部が集中している。マウントスコープスは、独立直後の中東戦争の結果、イスラエル本体から切り離され、1967年6月までヨルダンに包囲されるという状態が続いた。理工系学部は新市内のギバトラム（エドモンド・サフラ・キャンパス）、医学部がエルサレム郊外のエイン・ケレム、農学部がテルアビブに近いレホボトに設置されている。私が滞在した東アジア学科は旧市街を見下ろすマウントスコープスにあり、大学の建物は遠くから眺めると、砦かトーチカと見まがうばかりの外観をしている。建物の内部はまるで迷路のようで、自分の研究室から秘書の部屋まで行くのに最初は30分かかり、あやうく迷子になりそうであった。なんでもテロリストや外敵が侵入した場合に備えているのだというまことしやかな噂を信じたくなるような構造である。大学キャンパスは周囲を厳重な塀で囲まれており、入構するには正門に立っているガードにIDを示し、さらに金属探知のゲートをくぐりぬけたのち、バッグなど手荷物の検査

を受ける。セキュリティは空港並みの厳しさで、チェックに時間がかかるため、当然遅刻する学生も出てくる。だから、毎朝、授業開始時刻が近づく、正門前は授業に遅れまいとする教員や学生で押し合いへし合いの光景が繰り返される。教員だからといってセキュリティ・チェックのお目こぼしにあうということはない。ガードをしていた学生はたまたま私の授業の受講生のひとりであったが、彼女は私に目であいさつただけで、私が差し出したバッグの中身をきちんとあらためていた。

東アジア学科の学生は約400人で、このうち、中国を専攻する学生は250人ほど、日本専攻が150人位である。かつて、日本研究は同学科の人気コースであったが、現在では中国研究を希望する学生が急増するようになってきている。実際に中国、韓国からの留学生も目立ってふえており、ほとんど出会うことのない日本人留学生と対照的であった。そうなることこれまで優遇されてきた日本研究にかわってスタッフの数や予算などの面で中国研究の充実化が求められ、日本研究の古参教授が定年で退職しても、そのあとを自動的に日本研究者で埋めるということはず、学生の人気上昇している中国研究のスタッフを登用するという、リクルートメントをおこなっている。この方法だとそれまでの教育・研究の継続性が問題視されるかもしれないが、ある意味では極めて合理的である。イスラエルの大学は世界中のユダヤ人社会との深い絆で結ばれており、大学の図書館や建物、庭園にいたるまで欧米のユダヤ人富豪の遺産や寄付で建造されたものが多く、こうした建造物には寄付者の名前がプレートではめ込まれたり、建物そのものに寄付者の名前がかぶされていたりする。欧米などのユダヤ人はホロコーストのときに何もできなかったとの呵責の念が強いし、また異郷の地にあって祖先の地であるイスラエルの発展を願っているから、競って教育・研究活動への寄

付を惜しまない。研究費、奨学金など日本人からするとうらやましいほどだが、それでも小さな国で大学の教育予算をどう配分するのは深刻な問題であることに変わりなく、教員の給与が上がらなくて一昨年は教員のストライキが各大学で起こり、このため授業日数が不足する事態が発生した。学生もまた授業料値上げに敏感で、反対のデモが時折キャンパスを練り歩いている。したがって、乏しい予算をいまや日の出の勢いの中国の教育・研究の充実に向けるとするのはいたしかたのないことなのだろう。

### 3 原爆とホロコーストと謝罪と

私が担当した学部部の授業は、Japan in the World というタイトルで、つぎの内容で構成された。Japan: Past and Present, The Russo-Japanese War, Japan's Alliance with Nazi Germany, The Road to Pearl Harbor, Hiroshima and Nagasaki, Peace Constitution, Japan and the UN, Japan and the Middle East, Japan in Asia, Japan and ODA, Anti-Semitism or anti-Americanism or Xenophobia?, Japan's Future Perspective.

また、Japan and the Middle East という大学院のセミナーの内容はつぎのとおりであった。Characteristics of Japan's Middle Eastern Policy, Japan's Middle Eastern Policy in a Dilemma, Early Encounter with the Middle East, The Russo-Japanese War and its Impact on the Middle East, The Balfour Declaration and Japan, Japan's Jewish Policy after World War I, Oil Crisis and Pearl Harbor, Japan and Israel, Japan and the Palestinian Problem, The 1973 Oil Crisis, The Gulf War and Japan, Japan's Contribution to the Middle East Peace, Anti-Semitism in Japanese Mind.

以上の題目から明らかのように、私の担当授業はイスラエル人およびユダヤ人の歴史ないしは関

心を強く意識した内容となっている。受講生は、学部授業が35名、大学院が10名で、学部授業には高齢の市民2名が聴講に通っていた（授業は学生だけでなく納税者である一般市民にも開放されており、非常によい制度だと感心した）。全員ユダヤ人であり、アラブ人はいなかった。アラブ人学生は一般にイスラム、中東研究を専攻する傾向があるという。学生のなかでロシアからの移民が目立つ。これは名前でわかる。ロシア出身の学生は大半がソ連崩壊後イスラエルに移住した者で、理工系学部が多く、レベルはかなり高いというのが評判であった。彼らはキャンパスにいてもひとかたまりになってロシア語で話しているから、すぐわかる。

イスラエルの学生は男女とも全員が徴兵制を終えて就学するので平均年齢が高い。それだけに好奇心も問題意識も旺盛でよく勉強する。

私の授業に登録した学生はいずれも東アジア学科に所属し、日本や中国を専攻しており、現代の日本に対する関心は当然強い。私の授業を受講して、自分たちの国や民族がかつて日本と極めて深い関係にあった事実を知ったことは彼らに新鮮な驚きと強い印象を与えたようである。

ヒロシマ・ナガサキの原爆について話をする前にあらかじめ、バートン・バーンスタインの論文 *The Atomic Bombings Reconsidered* (*Foreign Affairs*, 1995) のコピーを全員に配り、事前に読んでもらった。この論文はアメリカがもはや敗北は秒読みの段階に入った日本になぜ原爆を落としたのかについて米側の事情を中心にあらためて議論を展開したものである。核問題が中東の空をおおっている現在、学生のヒロシマに関する理解は深かったが、それでもわずか1発の原爆でヒロシマでは14万人の命が失われることになり、いまなお被爆の後遺症に苦しみ、亡くなる人が絶えないと話すとき驚きの声があがったし、日本が反核運動の先頭にたつのも、こうした国民的悲劇に基づく

ものだと話すと、学生たちは素直に同意してくれた。私はナチのホロコーストを体験したユダヤ人なら日本人の被った悲劇がわかるだろうと考えていたのだが、彼らはもう少し冷静であった。実際に日本が反核を訴えても、つぎつぎと核兵器を入手する国が増え続けるのは日本が真剣に取り組んでこなかったのではないかとの意見もなかったわけではない。戦後日本がアメリカと安保条約を結び、アメリカの核の傘で日本の安全保障が保たれている状況を見れば、日本が世界に向かっていくら核の廃絶を説いても、それは道理にあわないことで、あまり説得力がないと学生たちは日本の姿勢を見透かしているのだ。本気に核廃絶に取り組むつもりなら、まず核の傘をどうにかしなければならぬのに、日本人にその用意がなければ、日本は犠牲者としての同情を集めても反核運動の先頭にたつ資格は疑わしいと見ているのだ。

ホロコーストの悲劇を国家の最大国是とするユダヤ人の決意を日本人は見習ったほうがいい。そこで思い出すのは、1973年春に当時西ドイツのウィーリー・ブランド首相がイスラエルを訪問したときのことだ。イスラエルはまずブランドをエルサレムにあるヤド・ヴァシェーム（ホロコースト記念館）に連れて行った。このメッセージは強烈である。常にドイツ人に対してこの人類史上おそらく最大となるに違いない悲劇をきっちりと想起させ、二度とこのような忌まわしい事件が発生させないように釘をさしておくことにあるだろう。ブランドだけではない。イスラエルを訪れる世界の首脳はいずれも最初にこの記念館に詣でることになる。エジプトのサダト大統領も日本の村山首相もそうだった。イスラエル人はブランド首相が訪問のあとどういうコメントを出すかに全神経を集中していた。その内容が少しでも軽いとなると、イスラエル世論は激高し徹底的に当の首脳を非難する。私が滞在していたときに、ローマ法王がイスラエルとヨルダンを訪問した。この法王

ベネディクト16世の今回の訪問にイスラエルのみならず、世界中のユダヤ人もまたその言動に注目した。それもそのはず、ローマ教会は長年ユダヤ人を「キリスト殺し」と断罪し、このことがキリスト教世界のユダヤ人迫害の一因を作ったのである。しかもバチカンにはヒトラーに協力するなど、ホロコーストに無関係とは言えない過去がある。さらに法王はドイツ出身で、少年時代ヒトラー・ユーゲントに所属した経歴をもつ。バチカンが、最終的に「キリスト殺し」の非を認め、ユダヤ教徒に対する中傷を終止するのは1960年代に開催されたバチカン公会議のときであった。ちなみにこのときの第二回バチカン公会議は、教会のありかたについても審議し、さまざまな改革方針を決定したことで知られ、解放の神学にも道を開いたのである。したがって、2009年の法王訪問が、法王としての立場と、ドイツ人としての立場からあの時代をどう総括するのかに全ユダヤ世界の注目が集まったのは当然であった。ナチズムの消えない過去にどう謝罪するのか。しかし、法王がドイツ人としての立場を明確にせず、もっぱら法王としての姿勢に終始したことで国民の間に失望が広がった。イスラエル人からすれば、訪問中法王の説く中東に平和を、の言葉が白々しくしか感じられなかったのだろう。

こうしたユダヤ人側の姿勢は、2010年の夏にわが国でも見受けられた、中国や韓国にいつまで謝罪し続けなければならないのか、というおよそ見当はずれの疑問でしか過去と向き合えない日本人には理解がおよばないことだろう。いつまでと問われれば、永遠に、と答えるしかないだろう。戦後、どこの国よりも過去を厳しく清算し、ナチズムと決別したはずのドイツでもネオナチの台頭が認められる。最近日本でも狭量なナショナリズムのうごめきを感じられる。日本人は永遠に東アジアの近代史と向き合わなければならない。ドイツ人と同じように。この覚悟が日本人にはあるのだろうか。

ところで、私は授業のなかで、1940年9月の日独伊三国同盟について話し、そのなかで日本はホロコーストに直接のかかわりはないものの、ドイツの同盟国としての責任は免れないのではないかと述べた。実際に、日本の責任を問う声がイスラエル人の間に少なからず存在することも事実である。たとえば、1952年に独立したばかりの日本が中東で最初に外交関係を樹立したのはイスラエルだが、当時のイスラエルの外相はナチの同盟国であった日本との国交に反対であったと聞く。さらに昭和天皇の葬儀にイスラエルは大統領を列席させたが、この弔問にもイスラエル世論の一部から批判の声があがった。ドイツと同盟し結果的にホロコーストに加担したと日本の責任を追及したのである。このことを日本人は少なくとも記憶しておいたほうがいい。あれ（ユダヤ人600万の死）はドイツが勝手にやったことだから、日本は知らぬ、と言い切れないのだ。ついでだが、同盟関係を論じる際集団的自衛の権利・義務ばかりが強調されるが、一般に同盟国としての責任はどう考えたらいいのだろうか。換言すれば、同盟のパートナーの犯した行為に関してはどこまで責任を負えばよいのだろうか。日米同盟で日本は、アメリカの、古くはベトナム戦争、最近ではイラクやアフガニスタンなどの作戦をためらいもなく支持し、そのための施設、便益を提供し協力したのであるから、上記のホロコーストについてユダヤ人からその責任を指摘される例をあげるまでもなく、同盟のパートナーであるアメリカの一連の軍事作戦に対する責任を言い逃れするわけにいくまい。

#### 4 平和憲法

憲法9条のテキストは平和研の木村さん、渡辺さんにロシア語、アラビア語などの外国語版を用意してもらい、そのコピーを学生たちに配布した。これは好評であった（お二人に感謝）。イス

ラエルと日本は、こと安全保障に関する限り、対極にあると言っていいだろう。イスラエル人であれば、18歳になると、男子は3年、女子は2年兵役につく義務がある。長い間の差別と迫害の歴史を経験し、国が独立したあとも、四囲を敵意にさらされ、片時も油断できない状態がもう60年以上も続いている。ユダヤ人の歴史とは非日常性の日常化と言ってもよいが、それに対して、日本は戦後、戦争に出かけていくこともなく、平和な状態がずっと続いている。この状態が日常化している。これは平和憲法の存在に大きく基づくものだが、その憲法を改定し戦争がおこなえるように改めようという声がかんたんと強くなっているという日本の現状がある。言いかえれば、この日常性のなかに非日常性を持ち込もうという世論がいまやわが国では形成されつつある。

イスラエル人が日本の誇る平和憲法にどういう反応を示すか、楽しみであった。しかし、憲法の条文に初めてふれた学生たちの反応は、予想したとおり、戦争直後にこのような理想的憲法を採用したのは当時の国民の悲願を体現しており、確かにすばらしいが、その後の国際政治、とくに東アジアの国際政治の現状を見ると、現実的ではない、というものであった。戦後60年以上の間、日本はひとりの戦死者も出さなかったと胸を張ってみても、国が創設されたときから、徴兵制のもと、国家を守るのが市民の義務であることにいささかの疑いももたないイスラエル人にはあまりインパクトはない。この憲法がいまや改正の危機に直面していると説明しても、イスラエル人にはピンとこない。東アジアの地図を示すと、躍進する大中国と世界に逆らっている感のある北朝鮮の存在という地政学的な位置関係が否応なしにイスラエル人の視野のなかに飛び込んでくる。防衛予算は世界ランキングの4位を占めているが、肝心の防衛はアメリカにすべてまかせて、実際には汗をかかないでいる日本は彼らには理解しえないようで

る。ただひとつ救いであったのは、日本は武器をせっせと作り、世界中に売りまくっているのではなく、日本の経済の主力は車や電気製品といった平和産業であると理解されていることであった。

## 5 中東問題・中東和平

イスラエルにいと、パレスチナ問題や中東和平についてどうしても考えざるをえない。私がイスラエルに着いたのは、いわゆるガザ戦争がひとまず終息に向かって1カ月半がたったばかりのときであった。イスラエルへ向かう乗換経由地の搭乗口での警備はいつものとおり厳しかったが、テルアビブの空港も、市内も拍子抜けするくらいゆるやかであった。ひとびとはもはやガザ戦争を話題にすることもなく、学生たちは全く関心がなさそうであった。ありふれた日常性がテルアビブにもエルサレムにも見られた。日本のニュースで大騒ぎしていたのが嘘のようであった。ときどき思い出したようにガザからロケット弾が着弾したと報じられても、ひとびとの関心はずでに毎日の生活に移っていた。スーパーマーケットやビルの入り口でバッグのチェックを受ける光景が全く変わっていないだけである。4か月間の滞在中、治安の面で危険を感じたことは一度もなかった。私が滞在したのはエルサレムの北、アラブ人の町のすぐ隣であったから、夜になるとコーランの朗読の声が風のまにまに聞こえてきたし、銀行やスーパーにもアラブ人の客が多い。大学への道すがら、ハダサ病院の前を通る。この国の医療技術・設備は世界のトップレベルであり、患者であれば人種、民族に関係なく誰でも平等に診察を受けることができるから、朝早くから多くのアラブ人が車やタクシーで乗り付け混雑している。表面的にはユダヤ人もアラブ人も共存していた。

私が住むことになったアパートは、エルサレムでもさらに小高い丘陵にあり、ユダヤ、アラブ双

方のコミュニティの境界に位置している。一步外出すると遠くにヨルダン溪谷と荒涼とした大地が望める。しかし長年にわたって人間を寄せ付けなかった、この不毛の地にも人の手が加えられている。ユダヤ人の入植地が広がり、アラブ人の住居地に接する境には例のコンクリートの壁の建設が進められている。私がイスラエルへ行く少し前に村上春樹がエルサレム賞の授賞式に出席し、有名になった壁の話をした。壁の話はイスラエル人には受けなかったようだが、イスラエルの村上ブームは本物だ。ヘブライ語の翻訳書も出版され、人口700万程度の国でそれが数万部売れるというのは驚きである。

壁の評判が悪いのは当然であろう。本来共存してしかるべき二つのコミュニティが厚い壁で交流を阻まれている。しかし、多くのイスラエル人は壁のおかげで自爆テロが大幅に減ったと壁の効用を認め、やむを得ないと一定の理解を示す。テロは本当に減少したのか？ときくと、ひとりふたりのテロリストが銃を乱射しても殺せる数はたかが知れている。だが、壁は大規模なテロを確実に防いでくれる。テロリストがイスラエルに侵入し、車を盗み出す。その車を自分たちの村へ運び、爆弾を詰め込み、イスラエル内に運転して戻り、繁華街で自爆したらどうなる？少なくとも数十人の犠牲者が出ることは必定である、というのだ。実際に壁の建設が始まった2002年以来、大規模な自爆テロは激減しているようだ。

いまから30年以上も前にイスラエルの平和運動「シャローム・アフシャーブ（いまこそ平和を＝Peace Now）」が誕生した。この運動の中心になったのは軍の予備役将校であった。エジプトのサダト大統領が1977年に歴史的なイスラエル訪問をおこなって中東の平和に希望が沸いてきた当時、イスラエルもエジプトもその勢いを持続させなければならなかったのだが、この流れに水をさすような入植地拡大やテロ、それに報復のためのレバノ

ン侵攻などの動きが現れ、和平のムードは急速にしぼみつづいた。この状況に危機感を抱き、ベギン首相に対し、平和実現のための思い切った譲歩を求め、決起したのが軍の予備役将校であった。（Peace Nowの詳細については、拙稿「イスラエルのNGO「ピース・ナウ」」白井久和ほか編『民際外交の研究』参照）知人の大学教授は自家用車にPeace Nowのステッカーをはっていたほど、多くのインテリはこの運動を支持した。入植地の拡大に反対する抗議集会には数万人を動員するほど、Peace Nowは一時は大変な勢いをもっていた。今回イスラエルを訪れてみると、Peace Nowの影が希薄になったという印象をぬぐえない。確かにいまでもアラブとの和平を強く訴えており、その最大の障害である入植地の建設に反対する姿勢は昔も今も全く変わらないが、昔のような勢いはない。この運動の熱気が冷めてきた最大の原因はやはりパレスチナの無差別テロに起因しているように思われる。満員のバスが自爆テロで爆破され多数の犠牲者が出て、路線バスには怖くて乗れないという風潮が広がった。路線バスは庶民の足であり、テロの犠牲者の多くは、女性や子ども、老人などであったから、Peace Nowの活動家には衝撃的であった。つまり兵士のようなハードなターゲットでなく、社会の最も弱い層が巻き添えになる可能性が現実的となった。多くのひとびとは無差別テロの恐怖が平和という幻想に見切りをつけ、自分たちの問題に目を向けるようになる。テロがパレスチナ人との平和を真剣に望んでいたひとびとの意識を変えさせることになったとすれば、皮肉なことである。平均的なイスラエル人の平和観とは、管見によれば、おそらく、パレスチナ人は国を作るなりして、どうぞ自由にやってください、ただしイスラエルの安全に脅威とならないように、というものではなからうか。

ユダヤ、アラブの共存は難しい課題である。双方の境界に住んでいるせいか、深刻な話も伝わ

てくる。ユダヤ人の住宅地にある公園にアラブ人の子どもたちがやってきて遊びを始めると、ユダヤ人の親はあわてて自分たちの子どもを家へ帰してしまう。なかには公園の砂場で自転車や馬を乗り回すアラブ人の子どももいて、危険を感じたユダヤ人の親が警察に苦情を訴えても、警察は面倒な事態に発展するのを恐れてきちんと対応してくれない、など。表層的には共存を装っていても、近接しあっている境界ではユダヤ人もアラブ人も我慢の限界に到達しつつあるように見える。

## 6 日本・イスラエルのその後

ヘブライ大学の4か月間はあらためて多くのことを考える時間を提供してくれた。1973年に初めてイスラエルの土を踏んで以来、今回が確か8回目にあたるはずである。イスラエルを何度も訪ねていると、友人のアラビストから「パレスチナ人から奪った土地によく行く気になるね」と皮肉られたことがある。村上春樹がイスラエルの授賞式に出席するというだけで反対の声があがったことは記憶に新しい。たとえ悪の枢軸やテロ支援国家だろうが、どこの国に出かけようと勝手である。全く余計なお世話なのである。

35年以上前、イスラエルに住んだとき、私はボーダーの向こう側を見たくなくなった。向こう側からこちら側（つまり、イスラエル）を眺めたらどのように見えるのだろうか、自分の目で確認しなかったのである。問題はもうやって向こうに行くかであった。イスラエル入国の記録が残るパスポートではまずアラブ諸国には入れない。結果的にまずギリシアへ行き、新しくパスポートを発行してもらい、空路バイルートに降りて、陸路ダマスカス、アンマンそして空路カイロへ行くルートをたどった。イスラエル人の友人にこのプランを話したら、シリアなんかへ行ったら二度と帰れなくなるよ、と真顔でおどかされた。こうして1974

年の夏にボーダーの向こう側に入り、シリアではゴラン高原に行くことはできなかったが、アンマンへの途中の道路脇には戦車壕があちこちに掘られていて、第四次中東戦争の緊張感がまだ続いていた。ダマスカスの軍事博物館では陳列されていた、この戦争で撃墜されたイスラエル軍機の尾翼の破片を見物のシリア人が盛んに足蹴にしていたのが印象的であった。予想したように、ひとびとの暮らしはイスラエルと全く変わらなかった。レストランでは家族連れも、軍の高官とおぼしき立派な軍服をまとった一団もアラブ料理に舌鼓をうっていた。スークや街角ではつましいひとびとの生活の一端を垣間見ることができた。ヨルダンからイスラエル側を眺めたときの印象はある意味感動的であった。パレスチナ人のタクシー運転手は盛んにイスラエルのアラビア語放送を聞いていた。敵国の放送を聞けばアラブ世界の様子がわかるのだろう。アンマンの空港からカイロ行きの飛行機に乗るためのセキュリティ・チェックはものすごく厳しく、警備の係官からは執拗にパレスチナ人と接触しなかったか詰問された。ヨルダンの治安当局がこれほどパレスチナ人のことに神経質になる理由は、1970年秋のヨルダン政府軍とパレスチナ・ゲリラ勢力の内戦に由来するものだ。このとき、ヨルダン政府は国内で次第に増長するパレスチナ勢力に危機感を抱いており、フセイン国王に対する暗殺未遂事件やハイジャックなどを契機にパレスチナ・ゲリラ掃討作戦を展開、この内戦でパレスチナ人は1万人以上が殺され、ヨルダン軍に追われてイスラエル側に逃れたパレスチナ人も少なくなかったと言われる。その余波がまだくすぶり続けていたのである。イスラエル以上だと妙に感じってしまった。

私がボーダーの向こう側を一回りしてきたのは、1973年10月の第四次戦争の半年後であったが、庶民はどこでもつましく、かつしたたかに暮らしていた。たび重なる戦乱は明らかに彼らの生活に

影を落としているはずなのに、戦争慣れしているというのか、非日常性が日常化しているイスラエルに似ているなど感じたのである。

ときどきパレスチナ問題やアラブ・イスラエル紛争の原因は何かと問われることがある。しかし、はっきり言って一言でこれが原因だという答えを見つけるのは難しい。歴史的にはどういう経緯で現在のような状態になってしまったかを説明することはできても、その原因となるとすっきりとした解答が浮かぶわけではないからである。土地をめぐる問題が紛争の根底に横たわっていることは確かである。それに民族や宗教などの要素が深くからみついている。ユダヤ人は、イスラエルが神から授かった約束の地であり、父祖の地と信じて疑わないが、イスラム教徒によればパレスチナの地はイスラムの土地であり、イスラエルの存在などとうてい認められないということになる。双方の主張を考えれば理論的には全く妥協の余地はなさそうである。

4カ月ぶりに帰国してみると、日本の元気のなさが気になった。イスラエルでは中国や韓国の存在がやたら目についた。大学のキャンパスには先述したように中国人と韓国人の留学生が目立った。北京、ソウルとテルアビブの間には直行便が運航されており、このことが直通の路線がない日本との決定的な差となっているのではないかと指摘する声もある。確かに直通便があるということはそれだけ需要がある証拠で、後述するようにイスラエルにそれ相応の魅力があるからなのだろう。帰国してしばらくたったころガラパゴス化というコトバがあることを知った。携帯に代表されるように機能がやたら進化し続け、日本国内でしか通用しない現象を見事に言い当てている。このコトバの意味を知ったとき、なるほどと感心するとともに、新たな心配をした。実は、イスラエルにいるときレンタカーを4台利用した。内訳はアメリカ車が1台、日本車が2台、韓国車が1台で

ある。このうちの2台は具合が悪くて交換したものである。このなかで一番気に入ったのはHyundaiであった。この車は本当にすごい。気温40度以上の砂漠地帯を飛ばしていても全然へこたれないのだ。日本でなぜ売れないのか不思議なくらいである。私のアパートにあったSamsungのテレビといい、このHyundaiといい、韓国製製品のものすごさを初めて認識した。安くて性能がよければ当然売れる。欧米のホテルのテレビの多くもSamsungだし、道路は日本車と並んで韓国車が競いあっている。

その点でイスラエルも無視するわけにはいかない国である。イスラエルの主力産業はIT、ハイテクと農業であると思う。その象徴がUSBメモリとミニトマトであろう。いずれもイスラエル人が開発したものだという。この二つが世界のそれぞれのマーケットを席卷したのだ。イスラエルのハイテク産業についてはいまさらの感があるが、テルアビブから北へ向かった一帯はシリコンバレー（イスラエル人はシリコンワディという）として知られ、インテル、モトローラなどの欧米企業がひしめいている。いずれもイスラエルの高度の技術を目当てに進出したものだ。もうひとつ、知る人ぞ知るのがイスラエル農業である。イスラエルのマーケットへ行くと、世界中のあらゆる野菜、果物が山と積まれている。3月に柿を見たのにはびっくりした。農業に土地と水が不可欠であることは言うまでもないが、イスラエルは不毛の砂漠をどんどん緑化している。35年前に滞在したとき、エルサレムから死海に向かう道路沿いは見渡す限りひたすら荒涼とした砂漠が広がるのみだったが、今回行ってみると、町が生まれ、耕作地が出現している。死海からヨルダン国境に沿ってエイラートに南下する街道沿いも様変わりしており、車で走行していると、なつめやし園や耕作地がつぎつぎと姿をあらわす。水はこの地域では貴重だが、イスラエルはかつてのスプリンク



ラーによる大量の水散布方式を脱して、現在ではドリッピング・システムという独自の灌漑方法を開発し、コンピューター制御で地下水を効率よくコントロールしている。こうした技術改良が砂漠の緑化に成功し、農作物の生産に役立ったのだ。なお、このドリッピング・システムはエジプトなど一部のアラブ諸国でも導入されているという。

イスラエルと韓国（それに台湾を加えてもいいだろうが）には共通の要因がある。イスラエルの人口は約700万、韓国は4800万。資源はなく、国民は優秀である。常に緊張をはらむ近隣関係を抱える。人口の観点から両国とも国内のマーケットだけを相手にしていれば満足できるような国ではないということだ。運命的に海外に出かけていかなければならない。いわばグローバル化が生き残るための宿命なのである。そこが1億3000万もの人口を抱えている日本との決定的な違いではない

か。日本がガラパゴス島のようにになっている間にイスラエルと韓国はひたすらグローバル・スタンダードを目指して走り続けている。海外で両国の存在感が増大するわけである。一方、日本は一部の大企業を除くと、日本国内の大市場だけをあてにしていればなんとかなると思っているのだろうか。海外留学を希望する学生数も減少しているそう。日本の将来が思いやられる。

最後になるが、今回のプログラム実現にお骨折りいただいた国際交流基金、ヘブライ大学のほか、定年前であるにもかかわらず快く私を送り出してくれた明治学院大学に感謝申し上げます。また、授業に出席し、辛抱強く私に付き合ってくれたヘブライ大学の学生さんにあらためて感謝するとともに、この地に一日も早く平和が定着することを心から願う。